

サロン びわ湖芸術文化茶論

第2回

演劇が拓く地域の未来 ～アートによる土壌づくり～

ゲスト：多田淳之介（演出家、東京デスロック主宰）

聞き手：磯崎真一（俳優、furico 主宰、NPO 法人はまかる代表理事）

2019年9月15日(日) 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 研修室

サロン びわ湖芸術文化茶論

これからの地域がますます元気になり、その魅力を全国へ、世界へと発信していくために芸術文化が果たす役割について、各界で広く活躍するゲストを交えて語り合い、意見を交わすトークセッションです。

主催：公益財団法人びわ湖芸術文化財団 法人本部地域創造部

共催：文化・経済フォーラム滋賀

コーディネーター：佐藤千晴（ジャーナリスト）

企画委員：秋村洋、磯崎真一、岡永遠、角間利昭、大藤寛子、藤原顕太、藤原昌樹



びわ湖芸術文化茶論の第2回は、劇場や美術館などの文化施設で、ジャンルを問わず市民参加型のアートプログラムが求められている中、特に演劇が地域に対してできることは何か探ろうというものだ。長浜を拠点にアウトリーチや人材育成なども含めた演劇活動を行っている企画委員 磯崎真一が聴き手となって、埼玉県の富士見市民文化会館 キラリ☆ふじみで9年間芸術監督を務め、国内外で演劇活動を行う演出家 多田淳之介氏をゲストに招き、劇場での多彩な事例をもとに、演劇を通じた地域への関わり方やその可能性を語り合った。

演劇の力と土壌づくり

冒頭に企画委員の磯崎から、多田氏をゲストとして招いた理由が話された。磯崎は、滋賀県北部における自身の取り組みについて、今後どのように活動の幅を広げていけるか考えながら活動しているという。多田氏は自身が主宰となる劇団 東京デスクロックでの作品制作と並行して、2010年から今年3月までキラリ☆ふじみの芸術監督を務めてきた。磯崎は、市民との協働やアウトリーチなど、作品づくりにとどまらない多田氏の活動からヒントを得られたら、と話した。



多田氏は自己紹介を終えると、まず今回のテーマを掘り下げ、自身の考えを語った。いわゆる「アート／芸術」と呼ばれているものには、2つの捉えられ方があるという。

ひとつは、アーティストによる表現や作品、ある種の技術が必要とされる「超人間的行為」だ。コンサートで楽しむ演奏や歌、劇場で上演されるダンスや演劇、美術館で鑑賞する作品などがこれに当たるだろう。もうひとつは、生活の中であって、我々の日々の営みを豊かにする「人間的行為」である。一般的に、「アート／芸術」という言葉でまず想起されるのは前者ではないだろうか。しかし、多田氏は「超人間的行為」を支えるために、その基盤として「人間的行為」が必要だという。「お絵描きだったり、歌をうたって嬉しい、楽しいとか、朝起きて寝癖を直すのも僕は演劇だと思っている。お化粧するのもかなりアートに近いんじゃないか」、「綺麗なものを見て心が癒されるとか、それこそ琵琶湖を見て心が和むとか、そういうすごく人間的な行為がアートなんじゃないかな」。

「超人間的行為」こそが「アート／芸術」である、というイメージが固定されてしまうことについて、多田氏は日本の学校教育の問題をあげた。小さな頃は表現の自由さや多様性が担保されているのに、小学校に入った途端に、表現の「技術」を「評価」され、「競争」が生まれる。「超人間的行為も必要なんだけど、それを下支えするためには人間的行為がないといけないし、その価値も分かっていないといけないんじゃないか」。

続いて多田氏は、演劇について起源として考えられている2つの形態から、その特性を語

る。「儀式説：Theater」と「ものまね説：Play」である。つまり演劇とは、観るもの「Theater＝創作されたドラマ、ものがたり」であり、かつ演じるもの「Play＝人間像を作り、伝える」であるということだ。

演劇を観ることで、「自分の知らない世界、時代や国の違う人たちが考えていたことに出会ったり、現代劇でも自分以外の人はどういうことを考えているのかに出会ったり」、「それによって自分が悲しいと思ったり嬉しいと思ったり、ということに気づく」ことができる。また、「目の前の人の声や表情はものすごく情報量があるので、それをキャッチする力」が身についたり、他の観客と空間を共有することで「この人は(自分と)同じところで笑うし、私が笑ってるのにあの人は泣いてるし」、といった経験ができる。そして、演じることで「私はのんびり(した性格)だけど、短気な人はどうやってしゃべるのか」など、他者について想像することにもなる。加えて、演劇は「相手役との合意が形成されていないとつukれない」ため、協働力が備わったり、多様性や人間そのものについて考える機会となる。多田氏は、少子高齢化、格差の拡大、コミュニティの喪失が進む現在の日本において、演劇の「社会を形成する力」が必要であり、演劇を広めることで、これらの問題の多くは解決できる、と語る。

また、「アートによる土壌づくり」については、先に語った「人間的行為」としての芸術を「公教育に取り入れる」ことが必要だという。ただ、教育現場にも様々な問題があり、現実的にはなかなか簡単にはいかない。そして、その代わりとなれるのは公共施設であり、地域のアートセンター、劇場や文化施設がその役割を担うべきだと説いた。

キラリ☆ふじみの特色

多田氏は「アートによって豊かな地域をつくること」を目指し、キラリ☆ふじみで様々なプログラムの企画、実践を続けてきた。劇場が立地する富士見市の地域性について、東京との距離や人口比率をあげての解説のあと、劇場の特色や具体的な取り組みが紹介された。

まずキラリ☆ふじみの特筆すべき点は、公募制の芸術監督制度である。初代芸術監督の平田オリザ氏は、開館に向けた市民文化会館検討委員会で講師に呼ばれたことをきっかけに、行政ではなく市民からの声により、プロデューサーとして招かれることとなった。平田氏はその後2004年から「芸術監督」となる。そして平田氏の後を継ぐ2代目の生田萬氏以降の芸術監督は、公募により選出されることとなる。3代目である多田氏の後、今年の4月に新たに就任した白神ももこ氏と田上豊氏は、33人の応募の中から選ばれた、全国でも例をみない2人1組の芸術監督だ。

そして、アソシエイト・アーティスト^(注)を置くことで質の高い舞台芸術作品が継続的に生まれる環境をつくっており、新芸術監督の2人も、就任以前からアソシエイト・アーティストとして劇場に関わってきている。

(注)アソシエイト・アーティスト…キラリ☆ふじみのレパトリー作品の創造や市民と協働した作品創作を担うアーティスト。2011年からスタートした枠組み。現在は、田中泯(舞踊)、矢野誠(音楽)、永井愛(演劇)の3名がアソシエイト・アーティストとして活動。

キラリ☆ふじみがミッションとしているのは、「舞台芸術を身近に体験する場」、「東京では観られない作品上演」、「こどもたちの芸術体験作り」、「地域の人たちの交流の場」である。芸術監督やアソシエイト・アーティストによる作品を鑑賞する機会の提供にとどまらず、様々な形で市民が参加できる教育普及や地域交流プログラムを設けている。「子どもの頃に劇場に遊びにきて、興味のある子は演劇やダンスをやって、中高生になっても続けられて、ACT-Fは中高生から70代までのメンバーがいるので、劇場に関わりたい人がいればどの世代でも入ってこられるように間口を広くしています」と多田氏は話す。



市民とアーティストが協働するアウトリーチ

今回特に時間をとって紹介されたのが、このリージョナルカンパニー「ACT-F」の活動である。2016年のプログラム開始時に、カンパニーの活動について劇場ウェブサイトにかかれた文章は次のようなものだ。「文化・芸術に興味のある地域の方、地域に興味のある芸術家、俳優、作家、演出家、制作者、ダンサー、美術家、音楽家、地域・劇場の仕事に興味がある学生、初めての方も、地域での活動を充実させたいという方も、ジャンル・経験・年齢・市内外問わずご参加お待ちしております」。多田氏は「アーティストと市民が境目なく一緒に活動するというのが特徴です」、「僕が何かをしるというのではなくて、自分たちでやりたいこと、企画を出してくれと。そして、それを実現していこうというスタイルでやっていました」と語る。

アーティストが劇場でワークショップや市民参加型のイベントを行ったり、劇場のコーディネートの元で地域の様々な場所へ出かけていくというのは比較的よく見られる取り組みだが、市民がアーティストとともに劇場付属のカンパニーの構成員となり、一緒に地域へ出ていきアウトリーチを行うというのは、劇場の事業として稀に見る形態である。

立ち上げの2016年度から3年間、ACT-Fは「子ども」、「福祉」、「世界」と1年ごとにテーマを設けて活動してきた。その年のテーマに合わせて、地域のための取り組みを企画・実施しており、その活動は大きく2つに分けられるという。地域にアートを届ける「ケータリングアーツ」と、地域の活動に参画する「ジョイントアーツ」だ。ケータリングアーツは、地域の幼稚園やお店、公民館などに街中にアートを持っていくもの、ジョイントアーツは、お祭りなど地域にすでにあるイベントに参加する形のものである。

彼らの活動はアウトリーチに特化しており、そのほとんどが劇場の外、市内の様々な場所で行われる。活動の場も、劇場スタッフが探してくるのではなく、メンバーそれぞれが交渉に動くという。年に一度、劇場で行う活動発表では、その年の活動を総括し、来場者が楽しめる仕掛けをつくりあげる。

多田氏が紹介した中で、特に参加者からの反応が大きかったのが、「福祉」をテーマにし

た2期目の活動発表「超☆人生いろいろゲーム 2018」の様子だ。体験できる人生ゲームのようなもので、「こどもコース」「大人コース」「老後コース」から1つを選んで参加するものだという。

「こどもコース」は、大人になるためのミッションをクリアしていくというものだ。自分の家族や性格・特徴を決めるためにくじを引くが、何度でも引けるというルールで、複雑な人物像となることもある。家族が「母、母、おじ、兄、鳥」だったり、「同性が好きで体が柔らかくて背が高い」、「冷静で肌が黒い」という設定になったりし、参加者は自然と自分に与えられたキャラクターについて想像を巡らせることとなる。

「大人コース」では、「幸せな人生を送る」というのが目的になっており、どのような人生であっても最終的に「幸せだった」と言い切るというのがルールで、最後に「どこが幸せでしたか」とインタビューされ答えられればクリアというものだ。最初に人生設計をすることになっており、例えば「堅実な人生を送る」という目標を立てた人が、フリーターになり、子どもが10人生まれ、様々なアクシデントに見舞われたりもするが、それでも最後には「どう幸せだったか」を考え、説明しなくてはならない。

最後の「老後コース」は老後を体験するもので、これが参加者から最も人気があったそう。認知症になるかどうかを決めるルーレットの確率は実際のデータをもとに決められており、ルーレットを回した後は、それぞれの道でゲーム展開が変わっていくことになる。認知症の道に入ると「お腹が空いたので生ゴミを食べる」、「コタツでお漏らしをしたけど乾くと思ってそのまま寝ちゃう」など、なかなかシビアな内容になっていく。これらは実際に収集したエピソードをもとにつくられたという。

活動発表では、「こども」や「世界」をテーマにした年にも、客席と舞台がきっちり分かれた鑑賞型の作品制作ではなく、これと同様の参加型の企画となったようである。そこで得られる体験は、これから必要になってくると多田氏が話す演劇の力、「自分と異なる他者について考えること」につながるものばかりだ。



活動の拠点と担い手

また、活動を継続・発展させていくために、「地域拠点があることはやっぱり大事」と語る。それは必ずしも劇場でなくてもよく、市民センターや商店街の空きスペースなど、拠点があることで人が集まりやすく、ネットワーク化がしやすくなる。

それに加えて、担い手を発掘、育成すること。これも、必ずしもアーティストや何かの専門家である必要はない。ビデオの撮影や公演中のカーテンの開け閉めといった極めて地道な仕事も重要だし、日常生活のコネクションを活かして、普段行けない所でアウトリーチができたり、活動を伝えてくれたり、「普通の市民だからこそできることは一杯ある」。

こうしたコアな関係を作り、そこからネットワークを拡げていくためにも、「拠点がある

ことはやっぱり大事」と改めて強調した。

地域をつなぐ想像力

前半の多田氏の話を受け、後半は参加者全員で円座になりディスカッションを行なった。全員の自己紹介の後、あらかじめ集めた質問への多田氏の回答を起点に、参加者それぞれが普段の活動や生活の中で感じていることを投げかけたり、今回の話をより深めるなどのやり取りが交わされた。

特に滋賀県の現状に対して示唆的だったのが、多田氏から紹介された長崎での市民劇（大型市民参加舞台公演『長崎なう ～私たちの街から～』）の事例だ。

合併を繰り返して大きくなった長崎市では、市の事業として市民参加型の劇をつくって市の中心部で上演しても、近隣地域の人しか参加できない、見られない、というのが課題だった。総合演出を任せられ、その解決を求められた多田氏が考えたのは、長崎市を東西南北のエリアに分け、各地域で作品をつくってそれぞれ発表し、最終的にそれらを市の中心部の劇場で一つの作品としてまとめて上演する、という企画である。

そうすると、出演者の知人などが各地域から集まり、彼らは自動的に他の地域でつくられた作品も観ることになる。広い長崎市に住む人々にとっては、市内であっても普段自分の住む地域の外に思いを寄せることは少ないかもしれない。しかし、そこに暮らす人々が物語をつくりあげ、演じる姿を見ることにより、それまで通り過ぎるだけだった隣接する地域が、「ああいう子どもたちが住んでいるんだな」「あんな物語を見せてくれたな」と想像させ、イメージが立体的に立ち上がってくる場所になる。

滋賀県も、各地域に独自の文化があり、琵琶湖が中心にあることにより地域間のつながりが希薄であると捉えられがちだ。このサロンも、そういった現状を踏まえ、各地で活動する人がつながる場として機能することを目指して立ち上げられたものである。今回は、文化芸術に携わってきた人、興味のある人、演劇関係者などが県内外から集まり、自分たちの問題意識をより具体的に共有しようとする様子がみられた。キラリ☆ふじみの ACT-F では、3年間の取り組みが終了した後に、参加した市民の中から劇団を結成するなど独自の活動を



続ける人が出てきたという。劇場が拠点となって市民の力を引き出すことで、地域での新たな取り組みが生まれた好例である。

異なる場所で生き、これまで交わることのなかった人同士が会うことで、抱えていた課題に対するヒントを得られたり、新たなアイデアが生まれる場所として広く認知されるよう、このサロンをさらに活性化させ、今後も継続させていく仕組みづくりや運営方法を考えていきたい。

(岡 永遠)